

研究ノート

中国科幻小説の諸相(1)

——二つの国際的SF大会における報告——

山本 範子

目次

- 1 科幻小説とは
- 2 2007年中国(成都)国際科幻・奇幻大会
- 3 第六十五回世界SF大会・第四十六回日本SF大会
- 4 日本SFとの提携～ 世界的SF大会をきっかけに

1 科幻小説とは

科幻小説とは中国におけるSF小説の呼称である。中国でのSF小説の歴史や発展については、既に先行研究がありそれに詳しい。日本では『中国科学幻想文学館』(武田雅哉・林久之ノ大修館書店)¹があり、これを読めば基本を押さえることが出来る。中国国内では早くから科幻小説の研究が盛んであり、研究者や研究書も少なくない。

中国ではSF的な発想は古くから存在しており、たとえば『山海経』²は当時の世界地理志ではあるが、想像力に富んだ内容である。中国以外、つまり外国の地理や風物、生き物を描いてはいるものの、それらは明らかに空想上のものでしかない。それでも長く、それらが事実として信じられてきたところに、中国人の奇想天外な発想の源、彼らの好みなどを見てとることができよう。また、孔子が

「君子は怪力乱神を語らず」と述べたのも、当時の人々が好んで語っていたからだということがわかる。

既に中国では古代よりSFを受け入れることのできる土台を持っていたわけであり、六朝時代の作品である『搜神記』³においても不思議な少年が突然現れて子どもたちと遊ぶが、実はその正体は火星人だった、という話が残っている。地球上の未確認生物だけではなく、何千年も前にもう異星人の物語を書いていたわけである。むろん、日本の『竹取物語』のかぐや姫が月の住人であるように、中国では嫦娥が逃亡して、月の住人になっている。⁴多くの仙女は天界から下ってきて人間の男と結ばれる。こういった話は神話や伝説を含めると枚挙にいとまがない。

時代は下って、明代に入ると神魔小説というジャンルが登場する。これは唐代伝奇小説や宋代志怪小説などの流れをくむものだが、より民衆的で荒唐無稽さを増し、長編化するものも少なくなかった。数年前にアニメやマンガで大流行した『封神演義』⁵では明らかな人造人間である哪吒⁶が登場する。日本でも西行法師が死体から人造人間を製作しているが⁷、そのさまはフランケンシュタイン⁸にも似ている。ただ哪吒の場合は異常出生譚なども加味して考えると、多分に神話的な要素も含んでいよう。『封神演義』ではほかに近代兵器と解釈できる武器が数多く登場し⁹、

キーワード：中国, 科幻小説, SF, 日本

或いはSF的要素を含んだ古典小説と言えるのかもしれない。

だが、ここで改めて「SF」とは何か、ということを考えねばならない。これは英語の Science Fiction である。科学的知識を用いた虚構であり、事実ではない。注意すべき点は「科学」である。この科学という言葉はどう解釈するかによって、何をSFと呼ぶか、その規定にぶれが生じるであろう。

そういった意味で『封神演義』などを読み返すと、あくまでも想像力に基づいており、決して現代で述べられる科学知識を用いられているわけではないのが分かる。

では、我々が考えるSF、科学知識に基づいた小説というのは、いつ頃から中国では意識されはじめたのであろうか。

清朝後期にジュール・ベルヌの小説が翻訳紹介されたことが、きっかけであるというのが現在の共通した認識である。¹⁰ 西欧からSF小説が輸入され、その翻訳の影響を受けて中国人作家たちもSFに手を染めるようになるのである。詳細は前述した『中国科学幻想文学館』(上巻)に記されているので、興味のある方はぜひご一読願いたい。

さて、SFという概念が定着しはじめた頃、戦争による列強の被害を受けていた中国では、SFを科学普及のために利用することになった。もちろんSF小説としては、西洋や日本の小説の影響もあったであろうが、これら科学普及小説(以下、科普小説)は当時の中国の社会情勢とも大きく関係していた。ここで喚起しておきたいのは、中国の文学はどの時代であっても、社会や政治と密接に関与しているという点である。科普小説の場合は富国強兵と密接につながっており、政府が率先して奨励したという背景がある。つまり、人民の教化というのが第一目的だったのである。そのため、純然たる娯楽小説ではなかった。科学が万能であり、劣勢である戦局も発明品によって大勝利に導かれる。中国は科学によっ

て輝かしい未来を約束されている、こういった内容が次々と書かれ、同時に読み物というよりは物理か化学の教科書のような作品も登場した。¹¹

このような科普小説は現在も残っており、以前ほどあからさまではないが、物語の途中で公式や図式、数式などが記されているものも少なくない。

しかし、やがて中国の改革開放の波によって、小説も変化を始める。人民を教化する科普小説はしだいにストーリーを重視するようになり、商売としての出版物となっていく。四川の雑誌「科幻世界」¹²は現在中国最大、世界でも最多発行部数のSF月刊誌である。ここでは国内作家の育成のみならず、海外作品の翻訳も積極的に行っている。

毎年中国国内対象の科幻大会(SF大会)を一回実施しているが、十年前に一度世界規模の大会を北京で開催している。2007年8月末に日本で世界SF大会(ワールドコン)が開催されるのにあわせて、中国でも成都で2007成都科幻・奇幻世界大会が開催された。これは日本での開催より一週間ほど前に中国で開くことにより、西欧からのゲストに中国へ立ち寄ってもらおうという意図である。実際に思惑は当たり、かなりの数の西欧ゲストやファンたちが中国、日本というコースでアジア旅行を楽しんだようである。朝日新聞の記事¹³にもなっていたが、著名なアメリカの作家デイヴィッド・プリン氏もその一人である。

十年ぶり、二度目の国際的なSF大会は中国における科幻小説の現状を少なからずアピールする結果となった。本稿は、成都大会およびワールドコンにおける中国科幻小説の現状についてまとめ、報告するものである。

2 2007年中国(成都)国際科幻・奇幻大会

中国で国際的なSF大会が開催されたのは97北京国際科幻大会以来のことである。大会支持団体は中国科学技術協会、大会主催団体は四川省科学技術協会、大会承認団体に科幻世界雑誌社と四川科技馆、大会協力団体は四川科学技術出版社、四川省科協国際部である。世界SF大会や日本SF大会が基本的にはボランティアによるものであることを考えると、中国での大会はやや趣が異なるようである。

この大会は、2007年8月24日から27日にかけて四川省・成都で開催された。国際という名の通り、海外からも多くのゲストを招待しており、ニール・ゲイマン氏、デイヴィッド・プリン氏、ロバート・J・ソウヤー氏¹⁴などそうそうたる面子であった。日本からは日本SF作家クラブ代表としてFT作家ひかわ玲子氏¹⁵、立原透耶¹⁶、および中国SF研究家・翻訳家林久之氏¹⁷の三人がゲストとして参加した。

ゲストは前もって簡単な文章を作成して大会側に送り、それをもとにして大会で発表を行う、ということであった。またプロフィールに加えて顔写真も要求されたのだが、これが実は無断でインターネット上に流されるという顛末。またファン対象のサイン帳が作成されており、A5判、一頁上下二分割して国内外のゲストの写真と名前が小さく載っていた。ほとんどが余白で、このスペースにSFファンがサインを書いてもらい収集するという仕組みである。特別に個人のファンでなくても、また名前を知らなくても、とにかく集める、ということに意味があるのか、実際に無名であるはずの筆者ですら周囲を取り囲まれ、サイン攻めにあってしまった。¹⁸ 写真やプロフィールの使い道などを全く知らなかったゲストたちは、最初はかなりとまどっていたようである。アメリカのコンベンションな

どに参加経験のあるゲストに尋ねてみたが、このようなサイン帳を主催者側が用意して配布、サイン収集を奨励するというのは初めてのことである。きわめて中国的な発想なのであろうか。

なお日本人ゲストは、24日は暴風雨で飛行機が飛ばず、上海であしどめをくらい、無事に成都にたどりついたのは25日の午前3時であった。

さてその25日は朝8時に集合し、午前中はオープニング・セレモニーが挙行された。都市中心部の広場で挙行され、レッドカーペットの敷かれた壇上にゲストが並ばされた。その後、選ばれた何人かが壇上に残り、あとは広場に用意されたパイプ椅子に腰かける。広場を埋めつくすファンたちは基本的には立ち見である。政府関係筋、市幹部などの挨拶が延々と炎天下の中つづき、ゲストの挨拶などを含めると二時間以上も費やされた。いったんお開きになった後、午後からは大会開始である。細長いパンフレットに日時と場所、ゲストと発表タイトルなどが記されており、これをもとにファンは見たいものを選ぶ。ただし同時刻に複数の企画が行われていただけでなく、企画によっては席が足りないばかりか、立ち見も入りきらない有様であった。盛況なのは良いが、主催者側としても出席者の人数をもう少し把握して、広い部屋を用意すべきではなかっただろうか。¹⁹

初日の午後は日本からのゲスト、林久之氏による講演「翻訳紹介の経験から」が行われた。読者だけではなく中国側の作家や編集者がたくさん出席しており、活発な意見交換が行われた。中国語と日本語の意識の違い、日本語訳する際の違和感などについて述べられたのだが、日本の状況を非常に良く把握している若者もおり、あとで聞くと大学や大学院で専門に科幻小说を研究している学生たちであった。

26日は午前中に日本ゲストの残り二人によ

る共同の講演。「日本におけるSF・FTの状況」について。非常に大きな会場を準備されていたが、ほぼ満員という盛況ぶりであった。日本のライト・ファンタジーやSFについては、まだあまり中国では知られていないようである。中国でよく知られているのは小松左京氏²⁰、田中芳樹氏²¹、夢枕獏氏²²、といったベテランの大物ばかりであり、実際に編集者に尋ねたところ、現時点では中国で翻訳出版されているもののほとんどが90年代頃までの日本SFであるという。

会場が非常に沸いた部分はイラストやアニメといった視覚的な部分であった。アニメのタイトル、アニメーターやイラストレーターの名前²³ が出ると大きな反応が返ってくる。日本の文化としてはアニメや漫画のほうが、小説よりも中国に浸透しているのだと改めて実感させられた。また、「萌え」²⁴ という言葉も既に理解されており、中国でも「萌」と呼んでいるのだそうである。まさしく、日本から輸入された言葉であり、概念である。「同性愛」²⁵ という言葉に対しても、くすくす笑いが生じただけであり、厳しい思想統制が施されているという印象は受けなかった。

ただこれはあくまでも読者側の反応であり、編集や出版に携わっている人々によると、未だに「上」からの影響や圧力は大きいのだという。SF小説も時に応じて、人民にふさわしくないと圧力を受けたり、或いは未来を築く手助けとして後押しを受けたりと、非常に時勢に敏感に左右されているらしい。最近では、数年前からブームとなり、女流若手作家を大量に輩出している²⁶ 奇幻小説 (FT小説) のジャンルが、空想的すぎる、現実逃避する、といった理由で、やや息苦しくなっているのだそう。

日本でも何か事件が起きると、マスコミがこぞってバッシングを行うが、それとはまた違った圧力であり、これはやはり中国ならではの特徴であると言えるかもしれない。

そういった意味では、科幻も奇幻も純粹な娯楽性を追求できるのか、そもそも小説という手法に娯楽を認めているのか、といった基本的な問題が生じてくる。

日本では純文学は認められるが、娯楽小説は文学作品として認めないという風潮が長らく続き、今もまだそういった見方は根強く残っている。中国でもやはりその傾向は強く、純文学ならともかく、娯楽小説とみなされる科幻や奇幻の世間からの風当たりは決して弱くはない。そういった固定観念に加えて、政治上・思想上の圧力がある中で、いかに科幻小説を普及・発展させていくか、といった点については、出版社や作家たちの並々ならぬ努力があったことは想像に難くない。²⁷

日本の発表企画はその二つだけであったが、寄稿文を集めた「2007中国 (成都) 国際科幻・奇幻大会文集」²⁸ が参加者に配布された。400頁足らずというボリュームで、投稿者の母語による文章と中国語訳の両方が掲載されている。海外からの投稿もあるがほとんどが参加ゲストによるものであり、企画で発表する内容とほぼ同じものが多い。日本からは参加ゲスト三人の文章以外に、日本人研究者上原かおり氏の論文が掲載されている。²⁹

執筆者は中国人が14名、アメリカ人が6名、カナダ人が1名、日本人が4名、ロシア人が1名という割合である。大会での企画内容とほぼ関連しているようである。そのため、企画を聞くことが出来なかった参加者はこの文集を読んでほしいの内容を把握する、という仕組みになっているようだ。10年前の北京国際大会でもやはり同じ方法がとられたとのこと。

さて実際に企画のいくつかを聞いてきたのだが、中国人の場合は当然中国語で、それ以外の言語の場合は中国語で同時通訳する、といった形式であった。

大学で専門的に科幻小説を研究・教育している呉岩氏³⁰ による「中国科幻的發展歷程」³¹

は中国の科幻小说の歴史を簡明に分かりやすく解説したもの。ユーモアを交えて語られる内容は、図版なども多く、非常に興味深いものであった。それによると、科幻小说という概念自体は百年ほどの歴史を持ち、日本と西欧からの影響で生じたものであるが、西欧のSF小説は実は当初は日本語訳されたものが入ってきていたのだという。1903年、魯迅による『月世界旅行』（ジュール・ベルヌ）の文雅な翻訳がきっかけとなり、それ以降影響を受けた中国人作家による作品が登場する……といったことから始まり、清末、民国と代表的な作品や作家の紹介が続いた。またそれぞれの時代の特徴、作品に求められる思想的な意味などを説明し、科幻小说には大きく分けると三つの時代がある、と結論づけた。現在は1990年からつづく第三期「多元化時期」であり、科幻小说は社会からの束縛が少なくなり、自由に創作できる環境のもと、次々と新しい作家たちが誕生している。しかし同時に深い印象を与える作品が少ないということやまだまだ発表の場が少ないという問題も残っている。さらに科学知識の乏しい作品も散見され、科幻小说を書くための科学技術知識の重要性³²などを主張されていた。「本当の科幻とは過去のものでなく、未来のものである！」という力強い言葉と共に発表は終わったが、その後も熱心な若者たちの質問が続き、彼らの関心の高さと熱気が感じられた。

実際に、この大会に一般参加しているのは圧倒的に若者が多く、大学生や高校生、或いはどう見ても小学生といった子供まで多数混じっていた。中国科幻小说のファン層はこういった若者に支えられているのであろう。³³

江曉原氏³⁴の「悲観的未来：科幻作品之三重境界」では、数百以上の欧米SF映画を見たがそのほとんどすべてが「悲観的な未来」を描いていた、という疑問から始まった。それはジュール・ヴェルヌ以来つづく西欧の未来観ではないか。対して中国の未来に対する

考え方は非常に楽観的である。ただし、中国ではSF映画というものがいないため、比較対象に小説を参考にしている、とのことである。以前に中国とフランスの子供たちに「旅行できるとしたらどの時代がいいか」というアンケートがあったが、フランスの子供たちのほとんどが今の時代を選じたのに対して、中国の子供たちは未来を選んだ。これはつまり、心理的に素晴らしいと思われる時代を尋ねているのであり、フランスは現在を、中国は未来であると感じたのである。中国人は未来が素晴らしいものだという楽観的な思想を基盤にしており、「科学は絶対に素晴らしい」「科幻とは科普の一部分だ」などと考えている。

なぜ西欧と中国では、未来や科学に対してこのように考え方が異なるのであろうか。江氏によれば、それは西洋の科学技術の発展があまりにも速すぎて、どこへ向かっているのか人間が制御できなくなっており、それに対する不安があるのではないかと、とのことであった。どこに行くか分からないと、ますます不安になるのが西欧で、心配しなくてもきっと素晴らしいと、感じるのが中国人なのだそうである。またSF映画制作者の大半は科学者でなく文学畑の人物であることにも問題があると指摘する。文学畑の人間の場合は必ず科学と文学の間に矛盾を感じるからだそうである。³⁵

またタイトルの一つめの境界は「硬科学」と「軟科学」の二種類³⁶のこと、二つめの境界は「科学」と「文学」、三つ目は「科学」と「哲学」である、と氏は述べられた。ユートピア、反ユートピアなど例を挙げ、時に具体的な作品名、作家名を出して比較しながらの講演であった。何度もくり返し「これは私個人の観点到過ぎない」と強調されていたのが印象的であった。残念ながら文集に、その内容は掲載されていない。

このように企画が全部文章として残ってい

ないのは残念だが、文集の紙面は外国人ゲスト中心に割いたようであり、未掲載の中国人による発表も何らかの形で残してもらえれば資料としてもありがたいと思う次第である。

大会の企画以外にも、ゲストに対するもてなしが数多くあり、昼食会や夕食会、変面³⁷、ダンスなどの鑑賞、ファンとの交流会、パンダ研究所や博物館、名所史跡の訪問など、びっしりとスケジュールが埋まっていた。小型バスやタクシーなどが準備され、通訳が絶えず待機するという、非常に中国的な歓待であった。

今回の10年ぶりの中国での国際大会は盛況で、大成功を収めたといってもいいであろう。ファン層の若さ、熱気は素晴らしいものがあり、やや成熟したファン層が中心の日本とは、全く異なる雰囲気であった。

3 第六十五回世界SF大会・第四十六回日本SF大会

引き続き、8月30日から9月3日まで日本では、横浜において第六十五回世界SF大会・第四十六回日本SF大会が開催された。今回アジアで初めて開催される世界SF大会と、毎年開催される日本SF大会とを一緒にしたものである。

中国の大会に参加した日本人三人は、そのまま今度は中国からのゲストを引き連れて帰国、直接横浜に向かった。³⁸ 中国からは科幻世界雑誌社の秦莉編集長、姚海軍副編集長³⁹、作家で研究者の呉岩氏、作家で新華社記者の韓松氏⁴⁰がゲストとして参加した。

この大会ではプログラムブックとして「Nippon 2007 the first Worldcon in Japan Souvenir Book」⁴¹が日本語・英語両言語で300頁を越える冊子として販売された。参加者にはコンパクトな無料プログラム(タイムスケジュールが分かりやすく明記されたもの)も配布された。

華やかなオープニング・セレモニーで中国人ゲストは感嘆していたが、儀礼的で堅苦しい中国の大会に対して、日本の娯楽性の高い式典はかなり刺激的であったようである。編集者たちが何度も「学ぶところがある」「今後の参考にしたい」とくり返していたのが印象的であった。

31日は11時から「SF雑誌編集者からみた日中SF気質」という企画が、林久之氏の司会で開催された。ゲストは中国から秦莉氏、姚海軍氏、日本からは塩澤快浩氏⁴²、大野修一氏⁴³が参加。前半は林氏による中国科幻雑誌の歴史などが語られ、後半は日本側から中国側への質問という形で進行された。中国では若手の育成に力を注いでおり、新人賞の授与や読者との交流などを大切にしているということ、科幻小説の担い手はほとんどが理科系の人間であるということ、中国での科幻小説雑誌は今は全部で三種類あるが『科幻世界』が最大部数であること、など、丁寧に説明がなされた。残念なことに企画が一時間しかなかったため、あまり詳細を聞くことはできなかったが、それでも集まった参加者には興味深い内容であった。⁴⁴

ただプログラム上のミスであろうか、全く同じ時刻に「中国、成都でのコンベンション」という企画があり、我々中国企画関係者は誰も見に行くことが出来なかった。聞くところによると、中国の大会に一般参加したアメリカ人ファンによる報告だったようである。

9月2日には午前10時から12時まで「アジアのSFと周辺事情～現状を語る」という企画が、立原透耶司会のもと、中国ゲスト韓松氏、日本人ゲスト狩野あざみ氏⁴⁵で行われた。韓松氏はパワーポイントを準備され、最初に彼による中国科幻小説の歴史と現状が語られた。中国に影響を与えた日本の作品として小説やアニメの画像⁴⁶が出るたびに、参加者から大きな反応が生じたのが印象深い。

韓松氏によると、SFは西欧から日本、日

本から中国にと影響を与えたという。中国は当初未来に対してユートピア的な考えを持っており、1950年代には代表的な作家である鄭文光氏などが登場する。しかしつづく1960年代からの十年間は文化大革命によって科幻小说の発展が止まる。この時期は現実を重視して幻想を否定したからである。科幻小说が復活したのは1978年頃からである。西欧のSF小説がどんどん翻訳され活発になり、中国でも科幻小说が創作され発表された。同時に日本のSFも大量に輸入され「鉄腕アトム」などは大人気となった。1983年から1990年代でいったん発展はとまり科普小説が中心となる。しかし、1990年代からまた新たな発展が始まり、科学文芸委員会⁴⁷が発足した。しかし、日本のSF小説の現在の作品はほとんど翻訳されておらず、日本SFの「今」を伝えるにはいたっていないのが現状である。⁴⁸

韓氏の発表のほかには、立原による中国作品の日本作品への影響（主に古典文学）の概説や、狩野氏による日本で有名な物語が実は中国伝来であるといった話⁴⁹などが行われた。

その後はもっぱら韓氏への質疑応答であった。今の中国文学における科幻小说の地位⁵⁰、中国では日本とは異なった「圧力」が存在するということが語られた。中国にもUFO協会が存在する、80年代以降特に日本文学の影響を受けるようになったこと、など多くのことが語られた。最後に韓氏の作品についての質問や解説があり、企画は幕を閉じた。

同日14時から二時間、林久之氏の司会で「SF創作活動を教育すること」という企画が行われた。中国側のゲストは呉岩氏、日本人側ゲストは川又千秋氏⁵¹である。両者とも大学でSF創作を指導しているという立場から、それぞれの国のSF教育、研究及び創作指導について経験を交えての討論となった。呉氏はパワーポイントを使用して、中国での科幻研究史・教育史について自身が実践して

いる授業などにも触れながら、詳細に解説された。また2007年には大学向けの科幻研究専門書を六冊出版⁵²、本格的な活動を印象づけた。川又氏も実際の授業における経験や学生の作品などを具体的に挙げながら日本のSF創作について語られた。残念ながら、両国ともまだSF教育はそれほど盛んとはいいがたく、限られた場所でしか受けることができない。その点については未だ発展途上の分野であると感じられた。

ゲスト同士が活発に質問を出し合い、互いの現状を把握しようとする姿勢が印象的であった。最後に、呉氏が「これをきっかけに日中で協力していける体制を築きたい。今後も連絡をとりあって共に努力していきたい」と述べ、満場の拍手で締めくくられた。

日本SF作家クラブが関与した中国関係の企画はこの三つであった。

中国ゲストは、興味のあるほかの企画を聞きに行ったり、ファンジンの販売を覗いたり、仮装行列や絵画展示を見たり……と思いに楽しんだようである。中国の大会でも本の販売はあったが、確か商業出版がほとんどであったように記憶している。ファンが自由に店出し、さまざまな方法で楽しんでいる様子は中国ゲストたちにも良い印象を与えたようである。

そのほかは日本SF作家クラブ主催のパーティや中国企画関係者による夕食会などが催されたが、中国側の歓待に比べれば貧相であったことは否めない。⁵³

大会終了後、中国ゲストはさらに数日滞在中国で、日本の出版社を回り、版權などの話し合いをすませてきたようである。海賊版が横行している中、中国でもこの科幻世界雑誌社のように、正規の版權を買い取って契約をかわし、出版しようとする姿勢は評価できよう。

帰国する前の中国側ゲストたちの明るい表情に、日本側としても心底ほっとしたのを今でも覚えている。

4 日本SFとの提携～世界的SF大会をきっかけに

二つの国際的なSF大会が終了し、既に2ヶ月近くが経過したが、日中のSF関係は新たな一面を迎えようとしている。

まず科幻世界雑誌社は日本の出版社複数と正式に契約を結び、そのうちの一家とは短編・中編で順調に翻訳が決まり、長編についても話し合いの最中であるという。これが実現すれば、長らく滞っていた日本の「今」のSF作品を中国に紹介できることになり、中国の読者に対しても新しい日本SFを伝えることができよう。

日本SF作家クラブでも正式に中国と交渉を開始することになり、立原透耶が中国窓口担当として任命された。またアジアでのSF作家の集いなどの開催についても、話し合いが行われている。

科幻世界雑誌社からも日本SF作家クラブに正式な要請や意見が送られ、SF大会の定期的な共同開催などが提案されている。

これまでは草の根的な交流でしかなかった日中のSFであるが、今夏の二つの国際的SF大会を経て、ようやく正式な協力体制が発足したと言えよう。まだまだ課題は山積みではあるが、一步一步確実に前進していけばと思う次第である。

註

- 1 『中国科学幻想文学館』上・下巻（武田雅哉・林久之／大修館書店あじあブックス／2001年発行）上巻は武田氏が担当し、中国の古代から清末・民国までのSF小説史を詳細に紹介している。下巻は林氏が担当、新中国成立から2000年頃までの内容を紹介している。非常に貴重な資料であり、巻末の索引や年表などは中国SF関係者ですら感嘆の声を漏らしていたほどである。
- 2 中国古代の地理書。外国の地理や文化、風俗、生き物などを奇想天外な発想で記している。長くそれが事実だと信じられてきた。
- 3 「火星人の少年」『搜神記』巻八／竹田晃 訳／平凡社東洋文庫）参照のこと。
- 4 2007年に日本が打ち上げた月観測衛星の名前は「かぐや」である。遅れて中国が打ち上げ成功したのが「嫦娥1号」という名前である。期せずして、共に伝説の月の住人、それも女性であったことは興味深い。
- 5 明代の長編章回小説、神魔小説。仙人や神々、人造人間、妖怪、人間などが入り乱れて、殷周革命に乗じて殺し合いを行う物語。
- 6 三年も母親の胎内にいて、誕生した時は肉塊であった。超人的な能力を持つ子供であったが、いたずらが好きでたびたび問題を起し、自死を選ぶ。哀れに思った仙人の思召しで、蓮から肉体を再生してもらって生まれ変わり、参戦する。
- 7 中世の説話集『撰集抄』に、山奥で西行法師が人骨を集めて反魂の術を用い、人造人間を作った物語。
- 8 メアリー・シェリー『フランケンシュタインすなわち現代のプロメシウス』。映画などでも非常に有名になった、つぎはぎ死体の人造人間の物語である。
- 9 レーザーのような殺人光線、ロケット弾のような爆弾、ウイルス攻撃などSF的な小道具が、中国的な名前と解釈で次から次へと登場している。
- 10 1900年刊行『八十日遠遊記』が嚆矢となった。日本では『八十日間世界一周』のタイトルで有名である。詳細は『中国科学幻想文学館』の上巻を参照されたし。
- 11 科学普及小説、略して科普小説と言われる。その名の通り、読者を教化するのが目的である。科学によって中国が戦争に勝利し、輝かしい未来を得るのだという、科学万能主義が目立った。
- 12 1979年に創設された科幻世界雑誌社の刊行物。現在は『科幻世界』『科幻世界訳文版』『飛・奇幻世界』『科幻世界画刊・小牛頓』の四種を発行。一時期SF雑誌が乱立したのだが、結局現在はこの『科幻世界』とあと二つほどしか残っていない。毎月発行されて、その発行部数は公称30万部、世界最大発行部数を誇っている。
- 13 2007年9/25の記事。多少、内容は異なるがネット (asahi.com) でも読むことが出来る。
- 14 いずれも世界を代表するSF作家。中国でも翻訳が進んでおり、絶大な人気を誇る。

- 15 日本を代表する女流FT作家、評論家。
- 16 1991年集英社よりデビュー。今回は中国留学経験をかわれての参加となった。本論筆者の筆名。
- 17 中国科幻小说研究会会長、中国SF翻訳家。
- 18 余談だが並ぶという概念がないのか、早いもの勝ち、あちこちから手とノートが突き出されてきて、非常に無秩序な印象を受けた。逆に日本で開催された世界SF大会では、日本人はサインをもらうのも写真を撮るのも、きちんと一列に並んで待っていた。中国人参加者のブログなどを見る限りでは、整列して並ぶという日本人の行為に非常に驚いた者も少なくないようである。
- 19 さらに余談だが、空調の壊れる部屋もあり、すし詰め蒸し暑い室内での企画もあった。
- 20 『日本沈没』は中国でも大ベストセラーになり、最近の日本製作映画も上映されて大ヒットした。小松左京氏の作品の翻訳はかなり古くからあり、現在中国で活躍している科幻作家たちにも多大な影響を与えている。
- 21 『銀河英雄伝説』が中国の書店では、一つのコーナーを作るほどで、やはり大ヒットしたそうだ。田中芳樹氏は中国を舞台にした作品も数多くてがけており、その点も中国人読者に支持される理由の一つだと聞いた。
- 22 『陰陽師』などの作品が次々と翻訳されており、最近ブームになっているらしい。厳密にはSFではないのだが、中国での恐怖小説（ホラー）の流行とも密接に関係があると思われる。
- 23 たとえば、ガンダム、マクロス、安彦良和などといった名前である。
- 24 昨今、アキバ系を代表するイメージを持つ言葉。アニメやマンガ、ゲームなどのキャラクターやシチュエーションに対する執着や好みなどを指すと思われるが、多種多様な用いられ方をしており、正確に解説することは難しい。
- 25 日本のライトノベルでは男性同士の恋愛である「ボーイズ・ラブ」という一つの市場を確立している。また『マリア様が見ている』シリーズ（今野緒雪／集英社コバルト文庫）はソフトなレズ的要素のある女子校もので、主に20代、30代の男性読者の圧倒的な支持を得ている。
- 26 科幻小説では圧倒的に男性作家が多いが、科幻小説は女性作家の誕生と活躍を促したようである。このあたりは、日本の状況とも似ているといえよう。
- 27 編集者に尋ねると、圧力があつたり奨励されたりと、時勢に応じて世間の状況がめまぐるしく変化しているようだ。現在は？ との問いに、「科幻はまずまず、奇幻はやや厳しい」とのこと。
- 28 英文タイトルは「2007 CHINA CHENGDU INTERNATIONAL SF/FANTASY CONFERENCE ESSAYS」である。
- 29 タイトルは「躁動的宇宙艺人——刘慈欣」。ゲスト参加しなかったためか、彼女の文章は中国語訳のみである。過去に日本で発表した論文「中国SF界の星・劉慈欣」(『季刊中国』79号/2004年12月)と同じようである。詳細に比較していないので断言できないが、再録もしくはそれに準じた内容かと思われる。実はこの文集に掲載されるよりも先に、インターネット上で中国人がこの文章を翻訳して発表していた。上原氏は中国科幻小说研究家として、中国でもよく知られている。
- 30 若くから著名な科幻小说家、研究家。現在は北京師範大学教育管理学院にて、科幻文学の研究する大学院生を指導している。現段階では、中国で科幻文学に関する大学院があるのはここだけである。
- 31 詳細は文集に掲載された「中国科幻研究发展的三个时期（缩编本）」や、教科書として発売された「科幻新概念理论丛书」（福建少年儿童出版社）全六冊を参照されたし。
- 32 いわゆる「ハードSF」は「硬科幻」と中国では呼ばれている。科学的な知識に裏打ちされたSFのことである。呉岩氏は良い例としてグレッグ・ベア『ブラッド・ミュージック』、デイヴィッド・ブリン『スノウ・クラッシュ』などを挙げておられた。
- 33 読者が作者になる場合も少なくないらしい。実際に、出版者側も若手の創作者育成に力を注いでいるとのことである。
- 34 上海交通大学文學院教授。科学評論家。
- 35 氏曰く、「文学にせよ哲学にせよ悲観的な結末ばかりである」だそうである。
- 36 ハードSFとソフトSFである。正確な自然科学知識と専門的な知識に基づいて描かれたものがハードSFと呼ばれる。ソフトSFはそれ以外のSF。江氏によると、往々にしてハードSF作家は「我々はきちんとした知識がある」と優越感を覚え、逆にソフトSF作家は「自分には裏打ちされた科学知識がない」と卑下してし

- まう傾向にあるという。これも一つの問題である、と氏は述べておられた。
- 37 四川省の伝統芸能。一瞬で次々と顔が変わる。
- 38 同行したのは科幻世界雑誌社編集長と副編集長、通訳の三名である。ゲスト作家の二名は別便で先に東京に到着、軽く観光を済ませてから、我々一行を出迎えた。
- 39 編集者として著名で、数々の作品集を編集している。国内作品のみならず、海外作品（英語圏）にも非常に明るい。
- 40 中国科幻小说の第一人者。独特の世界観と倫理観、哲学的かつ思索的で深い味わいのある作品を書く。中国語訳された日本文学を幼少から愛読し、名作文学から日本、SF、ホラー小説までその読書量は相当なものである。
- 41 挨拶やエッセイ、イラスト、日本SFについての文章など読み応えのある一冊である。英語版と日本語版が一冊に収まっている。
- 42 『SFマガジン』（早川書房）編集長。
- 43 『コミック リュウ』編集長。徳間書店でかつてはSF雑誌の編集などに携わった経験をもつ。
- 44 そもそも日本での中国科幻小说の認知度はかなり低い。出版点数も数えるほど、商業誌で紹介されることも稀である。また英語圏であれば原書を読むことの出来る人間は多いが、SF小説を中国語の原書で読む人間となると、ますます限られてくる。そういった意味では、このような大会で科幻小说の企画をたてるのは宣伝効果も含めて、良いことではないかと思われた。
- 45 主に中国を舞台にした小説を執筆する、著名な女流作家。
- 46 『鉄腕アトム』や小松左京氏、星新一氏などの巨匠の作品やSF、ホラーなど。
- 47 いわゆる日本SF作家クラブの中国版である。
- 48 宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』などSF的なアニメ、或いは映画やゲームは多く中国に入っており、子供たちはゲームの技などは日本語で覚えているのだという。
- 49 大岡越前の、子供を奪い合う二人の母親の話は中国の包公説話である、といったことなど。
- 50 日本と同様、低いという答えであった。書店で川端康成の本を買うと尊敬されるが、科幻小说を買うと子供っぽいと思われるという例が挙げられた。
- 51 著名な作家、淑徳大学国際コミュニケーション学部で小説創作を指導。
- 52 注30を参照のこと。なおこのシリーズは「十五」国家重点図書出版企画項目に選ばれている。国家的な規模で科幻研究が認められていることの証拠である。
- 53 大きな違いは、中国側は会社などが出資して海外ゲストを歓待している点である。日本SF作家クラブは作家の集まりであって、営利団体ではないため、すべてが作家たちの個人出資となる。その点でも中国と日本による対応の差が出てしまったのであろう。今後のつきあい方を考える上でも、この点は大きなポイントになるのではないだろうか。

(補足)

133頁で述べた江曉原氏の発表はのちに「科幻世界」（2007年10月期）に発表された。

[Abstract]

Aspects of Chinese Science Fiction (1) :
A Report about Two International SF Conventions

Noriko YAMAMOTO

This paper reports on recent Chinese Science Fiction. In 2007, the China Chengdu International SF/Fantasy Conference was held in Chengdu, China. And in 2007, the Japan Science Fiction Convention and the World Science Fiction Convention were held in Yokohama, Japan. The researcher took part in both conventions, and studied the situation of Chinese Science Fiction. In China, Science Fiction has had a significant impact on Western European and Japanese Science Fiction. Chinese Science Fiction is really sensitive toward society and the government. Present-day Chinese Science Fiction is better than before. These writers want to enter into a partnership with Japanese Science Fiction. As this interchange has began, it should be followed and reported on in the future.

Key Words: China, Science Fiction, Japan